

**[書評] 小田正雄著 『国際経済学の基礎』**

著者	田中 茂和
雑誌名	関西大学経済論集
巻	31
号	3
ページ	643-648
発行年	1981-10-20
その他のタイトル	[Review] Masao Oda, Essays in International Economics
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10112/14520">http://hdl.handle.net/10112/14520</a>

## 書 評

小田 正雄著

## 『国際経済学の基礎』

田 中 茂 和

## I

国際経済学で取扱われる諸問題は大きく分けて、貿易、貿易政策、国際収支および生産要素の国際移動の4つが挙げられる。この分野における教科書・概説書の内容構成については、貿易、とくにヘクシャー・オリーン理論を出発点とするか、ないしは中心にするのが一般的な慣例であり、国際収支から説きおこすのは、ごく最近の現象であり、依然として少数派のようである。本書もまたその例外でなく、ヘクシャー・オリーン・モデルを中心に論じている。

著者みずから序文で述べているように、本書のねらいの一つは、国際経済学における共通のトピックスを統一的に説明することにある。第3章で示される2財・3要素の特殊生産要素モデルは、本質的には特殊要素と一般要素との2要素モデルに帰着する以上、本書でなされる分析は終始一貫して、国際経済理論における基礎的かつ標準的な2国・2財・2要素モデルに依拠するものといえる。

以上の点では、この分野でこれまで世に出た類書とさほどの違いはみられないし、常識的なアプローチから逸脱していない。しかし本書は、既存の類書と区別できる幾つかの特長をもっており、決して同工異曲の標準化製品ではない。第1に、目次を開いてみればすぐに知られるように、その内容構成はかなり専門的である。通常のテキストの類いでよくみうけられる主題別的な取上げ方をさけ、むしろ理論的、ないしはモデルの特定化のパターンに従って展開されている。一例を挙げると、経済成長と貿易に関する章で一般に説明されるリプチンスキーの定理は、むしろ他の箇所、至る所で言及され、証明されている。こうした内容構成は、共通のトピックスがどのようにしてつくられ、またそれらをめぐっ

てどのような研究が行われているかを明らかにする、という本書の第二のねらいから派生している。

かくして既存の諸研究について簡潔なサーヴェイが各章毎に付与され、各章のモデルの発展段階、ないし位置付けが明らかである。そして、各章の依拠しているモデルの出典は明記されており、著者自らの展開も加えられて、読者の学習の為には、大変便宜的な工夫がほどこされている。

本書はそのタイトルにあつては『國際経済学の基礎』とうたつてはいるが、「基礎」という修辭は2国・2財・2要素という基礎的なフレームワークの下で、一通りのトピックスが説明されている、という意味であつて、入門的・初等的といった意味合いよりもむしろ専門的な解説書というべき内容である。以上述べてきたように、本書の主たる意図は、両方とも充分実現されているといえる。著者が主張するように、学部レベルの講義であれば2部門モデルで充分であり、またそれによつてかなりの議論ができる。

第2に本書においては幾何学的な説明は最少限にしか用いられず、代数的な説明に完全特化している。連立方程式モデルの解法に終始するきらいがないわけではない。欲をいえば、もう少し導かれた結果の解釈、ないしはインプリケーションについて配慮されれば、教科書としての学習効果を高めることができたのではないか。

とはいえ、本書は各章、ないし各トピックスが独立してフォローされるように説明されており、200ページ足らずにつめられたトピックスの豊富さ、その理論水準の高さを考えあわせると、テキストブックとしては恐らくマージナルなプライスの下で読者はかなり高い厚生水準に達することができよう。学部学生を対象としたテキストという著者の自認にかかわらず、本書は大学院初等においても充分利用価値のある内容を呈している。

最後に、本書のすぐれた第3の特長は、実物アプローチにとどまらず、かつまた貿易面に限定されず、貨幣面の分析・直接投資論が加えられ、國際経済の分野における一通りのトピックスをカバーしている点にある。もっとも貨幣理論のウェイトはわずか2章と低い。しかし、紙数の都合からいえば、これだけのページでこれ以上多くの事を語らせようとするのは無理難題というべきであろう。実物のみのテキストに終っていない点をむしろ評価したい。

## II

本書の内容構成は次の通りである。

### 第1章 序論

- 第1部 国際経済の純粋理論
  - 第2章 ヘクシャー・オリーン・モデル
  - 第3章 特殊要素モデル
  - 第4章 関税の理論
  - 第5章 中間財の理論
  - 第6章 生産要素移動の理論
  - 第7章 歪みの理論
  - 第8章 不確実性下の貿易理論
  - 第9章 経済成長と国際貿易
- 第2部 国際経済の貨幣理論
  - 第10章 国民所得と国際収支
  - 第11章 為替調整と国際収支
- 第3部 国際経済のカレント・トピックス
  - 第12章 直接投資の理論
  - 第13章 水平貿易と垂直貿易の理論
  - 付論 貿易摩擦の理論
  - むすび

以下、内容を批判的に紹介していこう。本書は実物アプローチの第1部、貨幣アプローチの第2部、カレント・トピックスが中心となる第3部といった構成からなる。

まず第2章で本書の分析の中核をなすヘクシャー・オリーン・モデルが手際良く示される。ここでは2つの定式化（ケンプ・サミュエルソン・タイプとジョーンズ・タイプ）が用いられ、国際経済学における基本的諸定理が明快に証明されていく。すなわち、ヘクシャー・オリーン、要素価格均等化、ストルパー・サミュエルソン、リプチンスキー定理等である。両モデル・タイプの呼称はどうやらバトラの流儀になっている様だが、ジョーンズ・タイプ・モデルはケンプ・サミュエルソン・タイプ・モデルと対応して用いられるなら、むしろジョーンズ・天野・タイプ・モデルと呼ぶのが適確ではないだろうか。

第2に、著者はヘクシャー・オリーン定理と要素価格均等化定理、そしてストルパー・サミュエルソン定理とリプチンスキー定理との間に双対関係があると指摘している。確かに後者は数量的に等しいことが証明されるが、前者の関係がそのような性格のものでない以上、双対関係があると解釈するのが適切か否か、疑問が残る。第3に細かい点で恐縮ではあるが、12ページの仰式の解釈として、いずれの財で測ってもストルパー・サミュエ

ルソン定理が成立すると結論されるが、その点充分に証明されていないように思われる。最後に、教育上の見地からいえば、本章を通じて貿易無差別曲線の経済的意味合いが不明瞭のままにされている点が惜まれる。それ故パレート最適の必要条件が明示されないまま、第7章にひきつがれている。学部のテキスト・レベルを念頭に置くとき、いささか省略されすぎたきらいがなきにしもあらずである。パレート最適は経済学徒にとって常識であるといえ、それまでであるが、専門的読者を別にすれば、この周辺の叙述はやや不連続な読後感を抱かせるのではなかろうか。

第3章は第2章で得られた諸命題が、特殊要素モデルでも成立しうるか、の検討にあてられている。以上の2章で本書の骨格をなす基本モデルの呈示は終わる。

第4章においては、貿易政策の代表である関税政策の効果分析が行われ、有効保護理論への橋わたしで閉じるが、問題がないわけではない。関税の諸効果のうち、所得分配に与える影響が国家間でのそれのみ限定されている。制限的な貿易政策は、その政策決定プロセスからかんがみて、むしろ生産要素所有者、ないしは経済主体間での所得分配効果に焦点をあわすべきである。従って、ここでストルパー・サミュエルソン定理が再度出現してもよさそうであるが、そうではない。適材適所的な見地に立てば、いささか奇異に映る。

さらに、自国がプラスの最適関税率を課しうるためには、外国のオプファー・カーヴが弾力的でなければならない(49ページ)と主張されるが、この表現は誤解を招きやすい。けだし、本書における上記の叙述は、外国のオプファー・カーヴの弾力性が1より小さい場合には、自国の最適関税率がマイナスになると解釈されかねないからである。むしろ最適関税率の公式は、外国のオプファー・カーヴが弾力的な場合にのみ有意味である、と結論づけるのが適切ではないかと思う。

第5章は中間財モデルにおいて、第2章と同様の事柄が論じられる。産業間フロー・タイプと純粹中間財の両ケースにわたって、リップチンスキー定理、ストルパー・サミュエルソン定理、貿易利益などが考察対象となる。しかし、第2章の最終財モデルでは、生産フロンティアにふれないまま、オプファー・カーヴで貿易利益を説明しているのに対し、本章では生産フロンティアと社会的無差別曲線が用いられる。こうした不一致は、中間財貿易と最終財貿易との間で貿易利益にどのような差異が生じうるか、という論点をあいまいにさせている。この点一貫性の保持が惜まれる。

第6章では、資本と技術の国際移動が主たる分析対象とされ、最適資本移動と技術移転の諸効果が明らかにされる。第7章では種々のディスティーションの存在がもたらす効果が

一般均衡論的に検討される。ここで本書ではじめて、パレート最適の必要条件が明らかにされる。第8章では、不確実性が存在する場合にストルパー・サミュエルソン定理、およびリプチンスキー定理が成立するか否かについて吟味される。

以上の章はせいぜい比較静学分析の段階にとどまるが、第9章に到って、はじめて動学分析が導入される。そして第2節以降の動学分析は、鬼木・宇沢モデルの詳述の体裁をとっている。通俗的なテキストにおいては、動学分析にまで言及することは稀であり、国際経済学が決して比較静学にとどまっていないことを認識させる機会を提供するものである。経済成長と貿易に関する部分は通常テキストにおいてはジョンソン流のバイアス論に基づいている。本書のバイアス論に関する説明もその例外でなく、ジョンソンの定式化に従ってはいるものの、図的説明には一切頼らず、直接には池間の数学的定式化(O.E.P)に依拠する所が大である。それにもかかわらず、参考文献に挙げられてないのはどのような理由に依るものか、不可解である。

さて、第2部の貨幣理論に議論を移そう。はじめに第10章においては、開放経済の下でのIS-LM曲線分析、そして政策割当問題が主たる内容となる。次いで第11章では、平価変更の収支調整効果について、弾力性アプローチ、マネタリー・アプローチ等が展望され、一般均衡収支調整モデルが構築される。要するに、簡潔にして要を得た内容構成となっている。

第3部は理論的関心というより、実際的なし政策的関心を背景とするトピックスの解説にあてられる。第12章では、直接投資に対する課税及び関税賦課が生産量や生産要素の報酬にいかなる影響を与えるかが論じられる。しかし、紙数の都合もあってか、直接投資現象の経済的原因といったポジティブな側面がほとんど言及されていないのが物足りない。もっとも最近この分野の研究に目立った進歩がみられないことは事実であるが。

最後に第13章では、主として垂直貿易の理論に焦点があてられる。水平貿易の理論は未だ百花斉放的であり、体系的な説明がされるには至っていない。本章のモデル分析は完全競争を前提として進められる。しかし、垂直貿易を考えると、完全競争モデルが経験的に支持されうるか、疑わしいように思える。そのことは、天然資源産業がしばしば寡占的市場構造で特長づけられる点に留意すれば、明らかであろう。

### III

以上、若干の疑問・難点に苦言を呈しながら、本書の内容を簡単に紹介してきた。全体を通じてみれば、いずれのトピックスに関しても、ごく最近(1981年)までの研究成果に

まで注意を払うのを怠ることなく、アップ・トゥ・デイトな内容をもつ専門的な教科書と評価できる。本書では、しばしば「周知のように」という副詞句が見受けられる。初等学習者にとっては決して周知ではなからう、と思われる箇所が少なくないが、それだけに本書が大学3、4年から大学院初級程度の読者を対象としうると考えれば、充分納得がいく。最近、同工異曲の初等的、あるいはいわゆる入門的な教科書・解説書が繁殖するさなか、本書のような専門的リーディングスの性格をもつ教科書の出現は慶賀すべきことである。読者はそれぞれ自己完結的であって、調和のとれたモデルに一つずつつきあわされる仕組みになっている。

ただ気にかかるのは本書の内容構成についてである。直接投資、及び垂直貿易をことさらにカレント・トピックスと称し、中間財・不確実性等の論議と区別し、第3部にふりかけている。もっともこれは多分に、著者の嗜好に属する体裁上のことにすぎなく、本書の価値を減じるものではないであろう。

本書の分析上の極立った特長は、 $2 \times 2$ モデルの枠内で種々の議論が展開されている点に見い出せる。当然のことながら、2国・2財モデルと多数国・多数財モデルとは常に調和するとは限らないのである。2部門モデルの意義と限界については、はしがきで一行で片付けることなく若干の言及があつてしかるべきではなからうか。

$2 \times 2$ モデルの枠組みにとどまってもこれだけの議論ができることは、著者がはしがきで述べているように、本書を読破すればおのずと会得されよう。段階的学習の上ではこれでひとまず充分であろう。しかしモデルの構築を学ぶ作業は、そのモデルの応用可能性についての関心を伴ってこそ意味があると思われる。

各章に注意深く目を通せば、本書のかなりの部分が実は、リプチンスキーの定理、ストルパー・サミュエルソン定理、ヘクシャー・オリーン定理、要素価格均等化定理等の証明に費されていることが知れる。このことは、はからずも国際経済学の領域において、上記の四つの基本的諸定理の精緻化、ないしは拡張にこれまで相当の努力が払われてきたことを物語っている。

ともかくも200ページ足らずの紙数において、国際経済のトピックスがこれ程バランスよく、しかもインテンシヴに記述されているテキストは他に類をみない。読者は一章を読破する毎に確実に一つのモデルを所有することができよう。ケンプの名著『国際貿易・投資の純粹理論』が近々翻訳出版される運びという話を耳にしているが、本書はそのすぐれた代替財として機能するであろう。(マグローヒル好學社、1981年6月刊、A5判、vi+215ページ、3,000円)